

藤原 武弘教授退職記念号によせて

社会学部長 萩 野 昌 弘

藤原武弘先生は、1969年3月に関西学院大学社会学部を卒業されました。この時期、大学は紛争のまただ中にあり、卒業式は通常より遅れ、8月3日に行われています。このときの社会学部卒業生代表が藤原先生でした（『関西学院大学社会学部30年史』154頁）。喧噪のなかにあつて、田中國夫教授ゼミで、先生はその後の研究の柱のひとつとなる態度変容に関する理論を学び、卒業論文は『年報社会心理学』に掲載されています。また、まだパソコンがなかった時代に、いち早く電子計算機の技術を習得されています。

卒業後、先生は、広島大学大学院教育学研究科（実験心理学専攻）博士課程を経て、1973年4月から広島大学教育学部福山分校助手、本学に着任された安田三郎教授の後任として、1979年4月から広島大学総合科学部に専任講師として赴任されています（1981年から助教授）。そして、師である田中教授の後任として、1994年に関西学院大学社会学部に赴任されました。また、同年博士課程前期課程指導教授、1996年から社会学研究科博士課程後期課程指導教授となり、社会学研究科の発展に大きな貢献をされています。

先生は、広島大学大学院時代に研究のかたわら、「夜はジャズ喫茶ファイブに入り浸」ったり、他の大学院生たちとさまざまなスポーツに興じたりしていたとのこと。その後、大学院時代の同級生仲間『ラブー愛の心理学』を翻訳出版され、その印税でみなでタイ旅行をされています。こうしたエピソードから再認識させられるのは、研究者の交遊とは「遊び仲間」になることであり、「遊び心」がなければ斬新な研究のアイデアは生まれえないということです。研究上の仲間同士でスポーツや旅行をすることと、研究の話をするとはつながっており、そのすべてが研究生活であるということ、業績を出すことばかりに追われる大学院生や、業績を積みせようとするわれわれ教員もあらためて肝に銘じるべきではないかと思えます。

先生は常に遊び心を持って、社会心理学のさまざまな領域で独創的な研究成果を出されています。まず、研究の大きな柱のひとつとして、社会的態度、態度変容に関する一連の研究があります。大学、大学院から助手、そして広島大学総合科学部専任講師、助教授時代の業績は『社会的態度の理論・測定・応用』（2001年）にまとめられています。また、これに先立って、広島大学に提出された博士学位論文を基に『態度変容理論としての精査可能性モデルの検証』（1995年）を刊行されています。この研究書は社会心理学における説得研究の代表的研究のひとつとして高く評価されています。

次に先生が早くから研究されているのが、映画の社会心理学です。1989年に出版された最初の単著『シネマ・サイコ』は、タイトル通り映画の社会心理学的研究で、最近も『社会学部紀要』で「映画の内容分析」に関する論文を次々掲載されています。また、写真を用いた調査法である写真投影法の開発も進められました。写真や映画のようなメディアを積極的に研究のなかに取り込む姿勢は先生の先駆性を物語っています。

先生は、広島大学の助教授時代に客員研究員としてセビア大学、本学部に赴任してから客員教授としてコンプルテンセ大学と、二度スペインで在外研究を行っています。セビア滞在の経験は大変おもしろい『セビージャ通信』（2007年）にまとめられています。先生はスペイン滞在からその後の研究のヒントを得ています。そのひとつが、巡礼行動に関する研究です。スペインで有名なサンチャゴ・デ・コンポステラなどのカトリック巡礼のを知り、四国遍路のような日本の巡礼についての研究をされています。

す。

以上のような研究にもまして重要なのが、阪神淡路大震災を契機として進められた震災後の所有物喪失に関する研究です。先生ご自身が、自宅が全壊するという大きな喪失体験をされています。それは、経験したものでなければなかなか理解できないできごとだと思いますが、先生は強靱な精神を持って、お住まいがあった芦屋の被災者の調査に向かわれました。その成果は「拡張的自己の非自発的喪失」に関する二本の論文にまとめられています。それぞれの論文は、2001年に日本社会心理学会賞着想独創賞、2004年には人間・環境学会賞を受賞されています。スペイン滞在の際に、同行した娘さんさんたちにとって大切なものがマンガ『ちびまる子ちゃん』だったことを発見し、異文化適応とモノとの関係に注目されていましたが、それが災害によるモノの余儀ない喪失について焦点をあてる研究につながったのでしょうか。いずれにせよ、震災研究が、個人が環境の変化のなかでいかに変容するかという基本的なテーマについて研究されてこられた先生の大きな研究成果のひとつであることは疑いありません。

日々の生活や研究者仲間との交流から問題を発見していく先生の姿勢が、大学院生の教育においても、いかに発揮されたことは、数多くの研究者が先生の下から巣立っていったことが示しています。先生は、最終講義で「僕の人生は3P?」と人生を位置づけ、3Pのひとつとして「Push 後輩や教え子から、押し上げてもらい」といわれ（あとの二つは、「Pull 先輩や指導教授から引き上げてもらい」と「Protect 同級生や同輩からは、守られ」）、最後に「or Play 遊んでもらう」と付け加えています。この Play の精神が大学院生に共有されていたことが、多くの人材を輩出すことにつながったのだと思います。それが、今日の社会学研究科の活況を生んだことはいまでもありません。

先生には、今後も遊び心のある研究の成果を出されることを心から願っております。